

知っていることと、行動すること

2011年の大規模な津波被害があった東日本大震災後に比較的大きな余震があって、津波警報が出たことがあります。あれだけの被害を目のあたりにしてきた人が、余震ではありますが、どのような行動を起こしたのかということで、後日アンケートした結果、警報にしたがって行動を起こした人はある地域では20%にも満たなかったそうで、中には海に行った人もいたということが報道されました。そして、あれだけの災害があったのだから、今後しばらくは津波などないだろうとか、津波が来るというのはこの目で確かめたかったという意見やどうすればよいのかわからなかったというものもあったそうです。おそらく、地震や津波は、今回のことで相当に知識としては蓄えられたと思いますが、いざというとき行動しない、できないというのはどうしてなのでしょう。もちろん、そこには自分なりの判断があったのかもしれませんが、知識が行動へという経路の難しさを感じます。

実際に見たり経験し、郷土学習や地域の防波堤や石碑を見ていたわけですので、大地震が来たらあるいは警報が出されたら津波が来る。その時には高台へ逃げるということは知識としては持っていたのです。しかし、実際に地震が来てみると、どうすることも自分からはできなくて、目の前のものを見ているだけになって、全く判断ができなかったのではないのでしょうか。ただ、知識と行動化という中間に訓練的なもの、目印のようなものが確実に機能していれば、経路はつながりやすかったような気がします。実際に、東日本大震災発生時に、地域全体が完全に避難することができた地域もありますが、多分そういうことではなかったかと思います。

知っていても行動できないということは、我々が日常的に経験するところですが、どうも知識というのはそのままでは、無くなりません。時間の経過とともにどこかの底にすぐに沈んでいくような気がします。その沈んだものを自由自在に浮遊させるというのには、どうしても訓練しながら知識を動かしておかないといけないような気がします。特に、地震は前触れなく一気にやってきますし、発生の頻度も比較的長いので、その必要性は強く感じます。河川災害は、かつては堤防もなく、かなりの頻度で洪水などがあって、遊水するという目をしていましたので、その挙動、癖を知って対応できていたような気がします。しかし、堤防やダムが出来てしまうと、そのようなふるまいを見ることができずに、逆に知らないで過ごすということになって、災害が起きると、知識としては知っていても今まで経験したことがないとか聞いたことがないということになってしまっています。

そのためにも、過去の地形や先人がどのようなことを経験して、そこからどのような知恵や構想をしてきたのかを学ぶことが必要ではないかと感じてしまいます。ダムや堤防で河川を制御できたというような錯覚で、勝手な土地利用をしていくと、いずれは大きな自然災害の影響を受けてしまうような要因になるのではないかと学ぶ必要があります。加えて、機会あるごとに訓練に参加しておくことが役に立つものと思います。